

心臓血管研究所付属病院における

低侵襲手術

Minimally Invasive Cardiac Surgery

への取組みについて

心臓血管研究所付属病院では、これまで標準的な胸骨正中切開手術に加え胸腔鏡を補助として用いた低侵襲心臓手術を行ってまいりました。この方法では主創として肋骨の間の皮膚を8cm程度切開する手術創に加え、1cm程度の皮膚切開を行うカメラポートから2Dの胸腔鏡を挿入し補助として使用しながら手術操作を行います。これにより胸骨を切開する必要がないため患者様の負担が少なく出血量や輸血量の低減を可能としました。しかしこの手術では肋間開胸器を用いて肋骨の間を広げ、直接心臓を見ながら手術を行うため、肋間を広げることによる術後疼痛や創の大きさに改善の余地がありました。

そこでさらに低侵襲心臓手術である「完全胸腔鏡下」心臓手術に着手いたしました。この手術では直視は用いず、カメラポートから挿入する3D胸腔鏡から得られる画像をモニターで観察しながら行います。これにより主創である肋骨の間の皮膚切開を今までの約半分の約4cm程度としています。また別な0.7cm程度の皮膚切開部より操作用ポートを挿入することで、主創に開胸器を使用しないため肋間を広げる操作が不要となり、傷がより小さく痛みもさらに少なくなりました。これにより社会復帰がより早くなり、美容の面でもさらに有利となりました。また当院では胸腔鏡に「ハイビジョン3D胸腔鏡」を用いるため、心臓の構造を立体的で鮮明に観察することができ、より正確な手術が可能となりました。さらに手術室スタッフ全員が同時に映像を見ることで、チーム全体で手術の流れを把握することができるため、よりスムーズな手術進行が可能となりました。

今回のセミナーでは当院での手術症例を踏まえながら低侵襲心臓手術の情報を皆様にお届けできたらと考えております。皆様のご参加をお願い申し上げます。